Save The Tropical Forests

ウータン

Hutan

125

森 の 通 信　　2017. 6. 27

=30 周年に向け(2000 年 ITTO に国内外 NGOs で違法材停止要請･これが世界の違法材停止の 1 起点となる)=(左から当時 ITTO マヌエル事務局長、AM ネット川上、ウータン西岡、海外 NGO、JATAN 小浜、PNG 森を守る会池田)

CONTENTS

・People(44) ハドラン氏など……p3
・ハルディさんの講演……p4～p6
・環境教育ワークショップなど……p7～p9
・新村長アチャイさん……p10～p11
・現地での資材購入……p12～p13
・りさこさんより……p13
・温暖化問題……p14
・2016年度会計報告・本の紹介……p15
・世界の森林ニュース……p16
・ウータンメンバーメディアに進出……p17
・会計より……p18
・パプアニューギニアの森の破壊……p19

Save The Tropical Forests
ウータン
Hutan
森 の 通 信
2017.6.27
125

専門性が高く、かつ誰もが参加できるNGOへ

ウータンの若手女性メンバーゆっこ&みっしーと４月に東京大学で行われたシンポジウム「インドネシアにおけるグリーン経済アプローチを通した森林･泥炭地からの温室効果ガス排出削減～準備段階から行動計画へ」に参加しました。インドネシアの環境林業省、泥炭地回復庁やJICAのREDD＋の話等がありました。インドネシアからは環境大臣まで来ていましたが、たまたまを装って同じエレベーターに乗り込み、握手をしてウータンの冊子を渡しました。また、ウータンの古くからの会員である研究者の方にもお会いし、貴重なお話しを伺うことができました。

今年ウータンでは、「大規模森林火災対策」と「熱帯泥炭地保全・再生」というテーマで助成金を得て、シンポジウムでお会いした大学の先生にもヒアリングに行く予定です。これらの活動計画をカリマンタンの現地で実行するのはなかなか骨が折れると思いますが、しっかりしたデータをもとに現地での活動を発展させていくことは、ウータンにとって大変なプラスになるはずです。これからも専門性の高い有益な情報を会報誌でみなさまに提供していきたいと思います！

また、“ゆっこ”　　が１年間カナダに行かれるということで、５月２８日に大阪の池田市の自然食レストラン「ばんまい」（前編集長永田さんが作られた素敵な家具がおいてあります）にて壮行会を行いました。カナダでは主に英語の勉強と国立公園でレンジャー業務を行うそうです（カナダも森林大国ですね！）。お料理は、箕面で自前の有機野菜を作っておられる神前先生にサラワク料理をふるまっていただきました。

主に集まったみんなから自己紹介とゆっことの思い出、ゆっこからはカナダの紹介や高知の四万十へアドバイザーで長期会員の大西さんを訪れた話、また僕から主にボルネオの写真をスライドショーとして流しながら談笑しました。ベテランから今年来てくれた若い子まで集まり、和気藹々とした楽しい会となりました。ゆっこにはさらに成長した姿を見せてくれることを期待しています。

ウータンは自他共に認めるユルい会ですが、来年３０年を迎える老舗でありながら、若いメンバーも増えて盛り上がってきました。誰もが参加でき、受け入れられ、活躍できる土壌と自己実現ができるような場づくりをこれからもめざしていきたいです。　（石崎 雄一郎）

【ウータン活動記録】

3/18,19　中井さん宅でドキュメンタリー映像編集@東かがわ市（石崎、近藤み）
3/31　あどぼの学校同志社でのゲスト講師（武田）
4/10　シンポジウムに参加「インドネシアにおけるグリーン経済アプローチを通した森林・泥炭地からの温室効果ガス排出削減～準備段階から行動計画へ」@東京大学（石崎、武田、近藤み）
4/15　アブラヤシ研究会参加（武田、近藤み）
4/16　C.O.Pハルディさん講演会共催@大阪・聖パウロ教会（4/15は京都観光）
4/20　大阪産業大学風岡先生授業でゲスト講演（石崎）
4/20,21　JICA社会調査法研修（フォローアップ編）参加（武田）@名古屋
4/22　ラジオ深夜便で西岡さんのインタビュー放送（西岡）
4/23　エシカルヴィーガンフェスティバルで講演@中崎町ホール（石崎、近藤み）
5/16　箕面こどもの森学園で出前授業（神前、大平、武田、近藤み）
5/28　ゆっこ壮行会@池田市ばんまい（メンバー多数）
5/29　関西学院大学松岡先生授業でゲスト講演（石崎）
6/5　YMCA高校浜本先生授業でゲスト講演（石崎）
6/11 第109回 北天満サイエンスカフェ「オランウータンの森を消費する私たち　見えない油　パーム油問題」での講演（神前）
3/21,3/28,4/4,14/8,4/25,5/2,5/9,15/6,5/23,5/30,6/6,6/13 ミーティング

People(44) ハドラン氏とMissy、Yucco

＝タンジュン・プティン国立公園において、火災後の植生調べの実施＝

（写真・文責/西岡）

1月、FNPF(Friends of the National Parks Foundation)のメンバーの主要メンバーの一人であるハドラン氏からタンジュン・プティン国立公園内のブグルでの植生調査を教えてもらう。
「ここも火災にあった。原因は国立公園での雨が降らなかったことで、森林の土壌が乾燥してしまった。トルク・プライ村でアブラヤシ開発しているためか、火入れを放置したらしい。海風に煽られ火が広がった。1ヶ月以上燃えたが植林後、樹木は成長した」とハドラン氏が言う。
「この一面は、なんでこんな一面にガラムの木が生えてきたの」とYuccoが聞く。
「詳しく解らないが、ガラムは荒れ地にも成長する樹木の1つ。たぶん鳥が種子をくわえて、落としたのかもしれない」と、ハドランさんが答える。
「あちらのガラムは成長して2m近くになっていましたが、ここでは一面に生えて成長するのでしょうか、ハドランさん」とMissyが尋ねる。
「解らないが、自然淘汰され、最初に大きくなりだした木が優先すると思うが、自然が知る。」大半の火災を鎮火できるなら、この地で実施している再植林のように上手く成長していくことが出来るかもしれない。大規模火災に強い地元の樹種での再植林の実施をインドネシアNGOと一緒に目指す。重要なのは二次林の破壊をこれ以上許さないことであり、村落林や共有林の保存、村人が生活のために使用する地区のゾーニングが必要。森林再生は最低で10年かかり、ある程度の二次林になるのは15年以上が必要だろう。何よりもアブラヤシ開発事業等の新規許可の停止と、泥炭湿地の5年間の開発全面停止の実施が必要になる。進みつつある。

ハルディさん講演　特別セミナー「ボルネオの森林破壊とオランウータン」の報告

以下は 4 月 16 日に大阪のドーンセンターで行われたハルディさんの講演（JATAN 熱帯林行動ネットワーク主催で、ウータン・森と生活を考える会は共催）の記録です。できるだけ通訳した近藤さんの言葉に忠実に記録したつもりですが、聞き間違いなど不正確なところがあるかもしれません。講演でハルディさんは、写真やビデオを使っていますが、スペースの関係で一部しか載せられませんでした。写真やビデオの内容を想像しながら読んでいただけると助かります。一部ですが、分かりにくかったところは、削除したり、書き直しているところもありますが、元の意味は変えないようにしたつもりです。この講演のあと、参加者から、たくさんの質問が出され、ハルディさんに答えていただきましたが、ここでは割愛いたします。（米澤）

私は Centre for Orangutan Protection（オランウータン保護センター）という団体から来ましたハルディと申します。写真で私が抱いているオランウータンの名前はヘルクレス、彼は私たちのセンターの中で、実は一番の劣等生です。オランウータンも人間と同じようなものですので、とっても賢い子もいれば、まあちょっと成績いまいちの子がいて、いろいろあります。オランウータンは DNA が人間と 97.3%同じなので、人間に近い知能をもっており、また、楽しい・悲しい・怖いというような感情を抱きます。人間のしぐさの真似もとてもよくしますので、たとえば檻の中に入っていても鍵をあけようとしたり、人間の服を盗んだり、なかにはブラジャーをつけようとしたような子もいます。

これはインドネシアの地図です。オレンジで示されているのは火災が起きた場所です。こうした火災の大きな要因となっているのが森林開発です。COP（オランウータン保護センター）は 2007 年に私が友達と一緒に設立した団体です。COP の目的は、オランウータンが直面する犯罪とじかに闘い、オランウータン等が棲む生態系を守ることです。COP は主に 3 つのチームからなっておりまして、「エイプ・ディフェンダー」がオランウータンの救助・リハビリをするチーム。「エイプ・クルセーダー」というのはオランウータンがレスキューされる要因になっている農園開発地の調査と開発している企業に対するキャンペーンを行うチーム。「エイプ・ウォーリアー」というのはオランウータンだけにかぎらず、野生生物の違法取引の調査および告発を行っているチームです。

これはパーム油の原料になっているアブラヤシの苗木の写真です。こちらがその苗木が少し育って農園になっている状態で、手前がアブラヤシの農園ですが、奥をよく見ていただくと、まだ森が残っているのが見えると思います。そこが森と農園の境界線になります。そして右上がアブラヤシの木で、右下がアブラヤシの実ですね。それが油になって左のようないろいろな日用品の中に使われています。こちらは外国の製品ですけれども、私たちみんなが使う日用品であり、「使ったことがない」と言える人はいないだろうことを分かっていただけると思います。あとは、燃料としても使われています。こういった需要が、森に起きている惨事のはじまりと言えると思います。アブラヤシを生産するための農園をつくるためには、だいたいの企業は森を切り拓いて農園をつくります。実はインドネシアには、いくつか劣化した土地というのもあるのですが、そういった土地を農園開発するというよりかは、多くの企業が森をわざわざ切り拓いて農園にするということを選びます。その理由としては、切り倒した木を木材として売ることで利益が増えるということがあります。価値ある大きい木材は切り倒したあとには森をなくしてしまわないと農園にできないですので、最後には火をつけて、森を燃やしてから農園開発をする企業が多いです。これは火災のあとの写真になりますが、こういった火災で生き残れる森の生物といったら、鳥ぐらいでしょう。森から飛んで逃げることができる鳥以外は、生き残れない。オランウータンもしかりでして、たとえ火災から逃げだせたとしても、森＝家をなくし、食料もなくなったオランウータンは、ホームレス状態になります。火災を生き延びたオランウータンというのは、そのあとにできたアブラヤシ農園で食料を探すことになります。他に食べものがないので、植わっているアブラヤシの若い芽を食べて農園側からは害獣と見なされます。農園労働者につかまえられたオランウータンの多くは殺

されます。火災を生き延びたオランウータンは、あとは農園労働者に殺されるのを待つだけの人生を送るというケースがほとんどです。たとえ殺されることを免れたとしても、食べ物がなく餓死してしまいます。労働者に捕まえられたオランウータンというのはほぼ確実に、頭か手に深い傷を負っています。この画像のオランウータンの目のあたりを見ていただくと、少し腫れているのが分かるかと思うのですが、これはたぶんなぐられた痕です。先程の（ビデオでのオランウータン）の声というのは、とてもこわがっていて、「やめてくれ」と言っている、あるいは「どっか行ってくれ」と言っています。そして、このように最後には鍬でなぐられてなくなります。なぜこのようなに暴力行使に出るかというと、オランウータンは人間の 6 倍ぐらいの力があるので、素手で立ち向かうと怖い。それで彼らは道具を使ってオランウータンにこのように傷を負わせるのです。なぐって気絶させ、手を縛って捕まえます。あるいはこのように指を切ってしまうケースがあって、いくつか理由があるのですけれども、一つとしては若いアブラヤシの芽をとった罰として切ると言うこともあります。あとは、例えばこの写真のオランウータンの赤ちゃんに関しては、赤ちゃんが母親にだきついて手を首の後ろまで回している状態の時に、プランテーションの労働者が母親を襲って、その時に母親の頭部を襲うことによって一緒に赤ちゃんの指に当てて切ってしまうということがあります。2000 年以降カリマンタンでは、2800 頭のオランウータンが救出されているというデータがありますが、その裏には 2 倍から 10 倍の数のオランウータンが、誰にも知られることなく殺されたり、餓死したりしていると考えられます。先程のオランウータンと違って、今のビデオのオランウータンは一見外傷がないように見えます。なので、他のオランウータンと比べてまだラッキーなのかなというふうに見えるのですが、他のキズが実はあります。特に女性の方はもしかしたらより共感されるかもしれませんが、表情を見ると失望して悲しそうな顔をしているのが分かると思います。このオランウータンの胸に注目すると乳首がたっている＝授乳の準備ができている状態なのが分かります。赤ちゃんがいるはずなのにいないということは、赤ちゃんと引き離されて、とても失望しているということです。外傷は見当たらないかも知れませんが、とても大きな心の傷を抱えています。外傷がなさそうに見えると言ったのですけれども、実はよくよく検査してみるとエアガンの銃弾が体の中からたくさん見つかりました。

私が COP を立ち上げた理由は、先程紹介したようなオランウータンを見てきて、そのオランウータンたちは真のアクションを求めており、そのために行動するためです。また、オランウータンを守る活動というのは、ひいては森を守る活動にもつながるのですが、その入り口としてとても人を誘致しやすい活動であるとも感じています。私たちの活動にはオランウータン保護以外にも様々なものがあり、開発企業、森林伐採に対するキャンペーンやアドボカシーもしています。それには、森林伐採の現場に行って証拠を集め、その調査結果を発表することで政策提言を行ったりしています。ウータン・森と生活を考える会とも協力しており、西岡さんと一緒に調査をしたこともあります。調査では必ず現場に出向き、写真を撮るなどの現場チェックをしています。写真のような白骨を証拠として見つけたこともあります。このような証拠をもってして警察に訴えかけ、厳しい法的処置を求めています。私たちは違法な開発行為に対しての調査をしているのですが、そのために企業から嫌がらせをされることもあります。インドネシアでは、きちんとした法的処置を求めることは難しいので、キャンペーンに市民を巻き込み、市民からのプレッシャーをかけるという工夫をしています。多くの人の注目を集めるために、私たちはとてもクリエイティブなやり方でキャンペーンを行っています。先程の調査やキャンペーンといった活動以外には、森林伐採地でオランウータンを実際に救助・保護し、森が残っているところに移送するという活動も行っています。そしてまた、オランウータン保護センター（リハビリを行う施設）も建設しました。

写真のような、労働者につかまえられ飼われているオランウータンたちをレスキューして、私たちのセンターでリハビリを行うこと

によって、第 2 の人生を送れるようにしています。オランウータンのリハビリには、とても長い時間がかかり、時にはとても難しいですし、多額の資金を要します。色々と問題はあるのですが、その 1 つとして、人間に飼われていたオランウータンは肝炎や結核などの人間の病気がうつってしまい、深刻な病状にいたっていることがあります。あるいは、檻に閉じ込められて生活していたオランウータンなどは、トラウマを抱えていて回復プログラムを受ける必要があります。

この写真は私たちがリハビリテーションセンターを建てた土地で、インドネシア環境林業省の演習林を無償で譲り受けたものです。ここでは、オランウータンの保護・リハビリ以外に、植樹活動も必要とされているところです。私たちの活動は本当に多岐にわたっていて、オランウータン保護以外にもこのような森林の再生にも今後どんどん取り組んでいく必要がありますので、皆さんに色んな形でご支援いただけたらありがたいです。COP はとても小さな団体で資金もとても少ないです。先程のオランウータン保護センターも、建設業者なしに私たちスタッフとボランティアだけで建設を行いました。COP のオランウータン保護センターは、今インドネシアで 5 番目のオランウータン保護センターです。ここには 19 頭のオランウータンがいて、彼らの新しい生活の場となっています。このうち 4 頭は野生復帰できない事情が抱えていますが、15 頭は野生復帰するために毎日トレーニングのために森の中に行っています。この写真はアニマル・キーパーと呼ばれるオランウータン・トレーニングの専門家として研修された地元の人で、彼らと一緒に森に入って、食料を探したり、巣を作ったりという森で生きる術を覚えるトレーニングを受け、夜にはまたセンターに戻ってくるという生活を過ごします。このアニマル・キーパーという職業が「ある」ということについては、地元の人の雇用を生み出すという側面と、このような研修を通じて野生動物の狩猟を減らすという 2 つのメリットがあります。その他にも色んな分野で地元の人への研修を行っていて、英語やパソコン、インターネットの使い方に関する研修もしています。このような交流が功をなして、最近ではオランウータン保護に対して地元からの支援を受けることができました。この写真は、オランウータンのための「島」と呼んでいる、川の中州です。この土地は、オランウータンの野生復帰の場所として活用するために、地元の人から購入したものです。リリース予定の 15 頭のオランウータンは、この「島」あるいは中州に野生復帰することになっています。ケージに入れられる生活から、最終的には野生に戻って人間とのコンタクトを絶って生活することになります。この野生復帰は、来月から少しずつ段階を経て進めていく予定です。このような活動ためにとても重要なのは、いいチームワークです。COP はスタッフとして教育する以前から COP スクール（コップ・スクール）というプログラムをしていまして、この研修を受けた人たちが、スタッフになるということでとてもいいチームワークを発揮しています。この COP スクールにはインドネシア全国から参加者がいて、海外では今のところアメリカ、イギリス、オーストラリアと韓国からの参加者を受け入れたことがあります。近い将来には日本からの参加者がいることを願っています。来月に研修が迫っているので、もし、希望の方がいらしたら、すぐにお知らせ下さい。

これは COP スクールの空撮写真で、ジョグジャカルタにあります。COP スクールの建設費の一部はウータン・森と生活を考える会にも支援を受けていますので、感謝します。ここには COP スクールの校舎、野外研修場所、それにキャンピンググランドがありますが、まだ空き地になっている場所があるので、もっと施設や設備を整えていきたいと考えています。COP は、今日ご紹介したような様々な活動をした結果、2011 年にはアンドリュース賞というものを受賞し、「アジアで最優秀の若手組織」という評価を受けました。このような受賞を得られたことも、皆さんからの支援のおかけだと思っております。ありがとうございます。

当日の参加者は 40 名ほどで会場は一杯でした。

ウータンで行なっている環境教育ワークショップ、講演会について

石崎 雄一郎

ウータン・森と生活を考える会では、その名前の通り、日本において「私たちの暮らしと森林減少とのつながりについて理解を広め、消費など様々な行為を見直すよう提案すること」をミッションの一つとしています。これまでに多くの学校や市民向け講演会、NGO や国際協力系イベントで、講演やワークショップをする機会をいただきました。今年すでに行なったのは、国際協力系イベント「ワン・ワールド・フェスティバル」、中崎町での「ヴィーガン・フェスティバル」、近畿大学や関西学院大学での授業などです。

僕が行う講演会やワークショップでよく使うタイトルは、「ボルネオの熱帯林と私たちの消費生活とのつながり」というものです。いざ失われゆく熱帯林を守ろうと呼びかけても、「大変だとは思うけど、所詮は遠い国で起こっていることだ」と捉えられることが多いのですが、その原因となるパーム油が使われているポテトチップスや板チョコとなると、一気に身近な商品、自分と関係があることだという意識へと変わります。

自分たちが使っているパーム油が、安価に安定的に供給され、様々なものに加工できるというメリットと生物多様性が失われ、労働者の人権や地域住民の土地紛争、健康問題を引き起こしている負の側面を考える機会をもってもらいます。

特に最近よく使うワークショップ手法は、「ロールプレイ」と呼ばれるもので、プランテーション企業、食品／洗剤企業、プランテーション労働者、インドネシア政府、NGO、先住民、そして消費者というステークホルダー（利害関係者）に分かれて、「パーム油産業と自然と共に暮らす人々や生きている動物たちがどう共存できる社会を作るか」をテーマにグループでそれぞれの立場になって考えてもらうというものです。

このワークショップは、「環境問題は多くの利害関係者からなり、それぞれの立場を考えながら協力しあう必要があること」を学ぶことを目的としています。単に他者を批判するのではなく、いかに協力できるかにポイントを置いています。このワークショップでは答えを出すことは設定しておらず、話し合いのプロセスを重視しています。特に社会へ出て多様な人々と交わることとなる若い学生にいい学びを提供することができます。

その他にも、「パーム油クイズ」というワークショップを行うことも多くあります。これらは、９つある○×問題を全て正解すると円になるというクイズカードを使って行うもので、４～６人のグループで共に楽しみながら考える機会を持ちます。クイズの後に解説としてボルネオの現状についてのお話をしますが、単に初めから講演だと退屈してしまうところを一度自分の頭で考えることを通して一気に聞く姿勢が生まれます。これは長年ボルネオ島のサラワク州で先住民の村へスタディツアーを行なってきた荒川共生さんに教えていただいたワークショップ手法です。

最近は、中井信介監督のドキュメンタリー短編映像「森をふたたび」をお話しに取り入れています。実際に動く映像を見ることで、現地の仲間や活動がわかり、まさに「百聞は一見にしかず」。この映像ではおなじみの FNPF のバスキさんが、かつて小学校や中学校を出てすぐに違法伐採や鉱山開発現場に従事していたが森林再生を行なっている仲間を引き合いに出し、「大切なのは学歴ではなく、学ぶ姿勢である」ことを強調しています。まさに若い人たちに伝えたいメッセージです。「森をふたたび」は YouTube にアップして、ウータンのウェブサイトでも見られるようになっています（ http://www.hutangroup.org ）どなたでもご覧いただけますので、ぜひお楽しみください。

講演会では、人々の関心や意見、アイデアなど様々な発見があり、僕自身が教えられることが多いです。また、「人に伝える」行為を通して、自分の中で論点が整理され、何を大切にしながら活動を進めていくかを問い直すきっかけになります。

この記事をお読みの方で、講演会やワークショップの開催にご関心がある方はぜひ、ウータン・森と生活を考える会の事務局（ info@hutangroup.org ）へご連絡ください。

また、ぜひ一緒にワークショップやお話をして見たいという方は大歓迎ですので、ご連絡ください。ウータンのミーティングなどでお話できればと思います。

2017 年 6 月

学校でのゲストティーチャー

昨年秋に石崎事務局長が体調を崩したのをきっかけに、代役として学校でゲストティーチャーをさせていただく事が増えました。元々教員を目指しており、教職に就いている友人も多いので、その仕事の大変さを思うと随分幸せな時間を頂いていると感じます。指導要領そっちのけで、伝えたい！と思うことに集中して授業を行える喜びを噛みしめつつ、毎回楽しんでいます。

それぞれ簡単にはなってしまいますが、どんな授業をさせていただいたかご報告いたします。

大学コンソーシアム大阪　グローバル人材育成事業

・2016 年 11 月 19 日　＠大阪駅前第 2 ビル キャンパスポート大阪（大阪市北区梅田）

・参加者：大学生 17 人（大阪にある複数の大学から有志の学生）

講師をされているフェアトレード・サマサマの小吹岳志さんからご紹介を頂きました。

小吹さんと相談し、就職活動を控えた比較的私も年が近い学生さんが対象なので、私自身とウータンの関わり、企業で勤めつつボランティアとして NGO で活動する中で感じた色々な難しさ等にも重点を置いてお話をさせていただきました。

小吹さん、そして私からのプレゼンの後は、グループに分かれてワークショップが実施され、私も参加させていただきました。有志で参加している学生さんという事に納得。多様な視点で意見が出され、相手を尊重した話の進め方が出来る様子に感心してしまいました。

大阪市立南港桜小学校

・2016 年 12 月 6 日　①11:40～12:25　②13:45～14:30

・参加者：6 年生 58 人（約 30 人×2 クラス）

国際理解教育にも注力されている山本昌彦先生から総合学習での授業のお話を頂きました。

1 クラス終えた後に、2 クラス目のみんなと給食や昼休憩、お掃除をご一緒してから授業を行うという充実した一日を過ごしました。授業では、思い付く限り多くの熱帯林が大切だと思う理由と、カリマンタンで今起きている事をお話しました。パーム油に関する問題、現地の仲間の活動、先生のリクエストにお答えして私自身の想いも少しお話しました。

後日みなさんからの感想文が届き、質問を書いてくれる子が多く居たので、お返事を A4 サイズ 3 枚程で作成して山本先生にデータ送信しました。各クラスに貼っていただいた様です。

常盤会学園大学

・2016 年 12 月 15 日　10:40～12:10　＠大阪市平野区喜連東

・参加者：大学生 4 人（実習と重なったので欠席者が多かった）

常盤会学園大学の国際こども教育学部で講師をされている新堀春輔さんからご依頼をいただきました。

ウータンの活動紹介とパーム油問題や現地の仲間の活動を紹介するプレゼンが半分、残り半分はワークショップを行いました。ワークではタンジュンハラパン村で自分たち（学生のみんな）が新しいプロジェクトを立ち上げるなら、どんな活動を誰と進めるか？考えて模造紙にまとめてもらいました。

同志社大学（あどぼの学校）

・2017 年 4 月 17 日　10:45～12:15　＠同志社大学 今出川キャンパス 扶桑館

・参加者：大学生 19 人（学年や学科の壁を越えて履修するプロジェクト科目として）

2015 年秋から京都や名古屋で「あどぼの学校」というアドボカシー（政策提言、公正・透明・対話型の社会に作り変える提案を行う活動）について学びを深める集まりがあります。このあどぼの学校として、関西 NGO 協議会の理事も務められている加藤良太さんが講師となり、大学生と NGO,NPO が協働してアドボカシーを実践するというプロジェクト科目が 2016 年から実施されています。今年度は、京のアジェンダ 21 と環境市民、ウータンの 3 団体からテーマ案を提示し、それをベースとしてプロジェクトを進められる予定です。ウータンからは、生協等の“食に対する関心層”をターゲットとしたパーム油に関するキャンペーンの企画及びアンケートでの意識調査を提案しました。

この日は、そもそもパーム油問題について聞いたことが無いという方が大半だったので、テーマ説明に加えて簡単なパーム油問題や RSPO に関するプレゼンと質疑応答も行いました。

箕面こどもの森学園（オルタナティブスクール）

・2017 年 5 月 16 日　10:10～10:50、11:00～11:40:　＠大阪府箕面市小野原西

・参加者：①小学生低学年：20 人 ②小学生高学年：18 人 ③中学生：12 人

菜の花プロジェクトの関係で長くお付き合いがある神前先生を通じてお話を頂きました。

週に 2 コマ程用いてテーマ学習をされており、1 学期は気候変動がテーマとの事。その 2 コマで授業を行いました。参加者①はミッシー、②は私、③は神前先生が担当しました。

①では動画を用いたり実際に中庭に出て植物に触れたりしながら、森林や熱帯林の大切さを伝えました。②ではプレゼンの後グループに分かれて模造紙に各自が出来る事書き出すワークショップを行い、熱帯林で起こっている問題と私たちの暮らしの繋がりについて考えました。③では講義中心に、菜の花プロジェクトとも絡めながら色々な油の紹介、パーム油問題や泥炭地問題について学習しました。また、大平さんが植物性油脂の含まれている製品についてメーカーに電話でパーム油が含まれているかどうか等を問い合わせて持ってきてくれたので、各クラスで紹介しました。

環境を壊す人からなおす人へ～新村長・アチャイさん

missy

「わしゃあ、昔は環境を壊してきたんだよ、金の採掘をしたりしてな。でも、FNPF と一緒に木を植えて償ってきた。村長としてもここの環境をなおしていきたいんだよ。」

タンジュン・ハラパン村[1]の新しい村長に選ばれたアチャイさんと話すと最後には必ずこのセリフで落ち着く。あとは、ジョグジャカルタで大学に通う「ハンサムな」息子の自慢話。「世界を股にかけたい！」とでも言う程の勢いを感じさせる口調と経歴のアチャイさんは、田舎の村出身にしては晩婚で奥さんはかなりの年下。家庭の事情に共通点の多いウータン代表は、笑顔を抑えられず大袈裟な相槌をうちながら彼の話に耳を傾ける。[2]

（写真：ウータンメンバーとアチャイさん）

◆アチャイさんの生い立ち

お父さんと同様セコニャール[3]生まれのアチャイさんだが、クマイ（近くの町）で学校に通い、16 歳で学校を修了した後は地元を出てインドネシア各地を渡り歩き（インドネシアに 34 ある州のうち 13 州を訪れた）仕事をする。37 歳でクマイに戻り結婚をして息子が産まれたが、その後間もなくして今度は海外へ。マレーシアやブルネイで働いたと言う。2008 年頃からタンジュン・プティン国立公園事務所に雇われ植林などの仕事を始め、森で同じように働いている仲間としてバスキたち FNPF と出会う。2012 年頃からは FNPF が支援するタンジュン・ハラパン村人グループに加わり、パダン・スンビラン[4]で牛の世話や苗木づくりに取り組んだ。

タンジュン・ハラパン村にゆかりがあるものの、人生の大半を村の外で過ごしてきたアチャイさんは、良くも悪くも村にとって少し「外部者」のような人だと言えるということだろうか。

◆タンジュン・ハラパン村と村長

この村の最初の村長は、アチャイさんのお父さん。国立公園の制定に伴い対岸地域に住んでいた人たちが移住させられタンジュン・ハラパン村ができた 1968 年に就任し、2000 年までの 32 年間村長を務め、その後はアチャイさんの弟が引き継いだ。2007 年から女性村長や村長代行（女性村長が汚職で逮捕されたため、彼女の任期終了まで外部から派遣されていた）が就任していた時期を経て、2016 年 9 月の選挙でアチャイさんが新村長として選ばれた。

---

[1] タンジュン・ハラパンは通称。正式名はセイ・セコニャール村。セコニャール川沿いに村があることが由来している。

[2] 本記事は、2017 年 1 月に代表を含むウータンメンバー3 人でカリマンタン渡航をした際の聞き取りに基づく。この時のアチャイさんは、日本人 3 人で取り囲んで話を聞いたこともあり、「お客さん対応モード」＝年配のおっちゃん＆村長という肩書きを持つような人にはありがちの自慢話が炸裂。情報の正確さには要注意。

[3] セコニャールについては脚注 1 を参照。お父さんが産まれた時にはタンジュン・ハラパン村はまだなく、お父さんは現在のタンジュン・プティン国立公園敷地内にあった集落で生まれ育ったと考えられる。

[4] パダン・スンビラン：国立公園に隣接する土地で、木材企業や地元民の農用地の跡地。FNPF はここで、国立公園とつなげる森づくりとともに地元の人が生計を立てるための農業・牛ビジネス・苗木づくりのプログラムを行なっている。

「タンジュン・ハラパン村」というと、通常は国立公園のタンジュン・プティン・キャンプの対岸にある、50 世帯強の集落のことを指すが、行政区域としては、そこから 40km 以上上流の川沿いの地域も含まれる。そこには、川沿いなどに点々と住居を構える人たちがいて、アブラヤシ・ゴム・野菜などの農業や漁業、あるいは金採掘をしている。実際、昨年 8 月には、選挙キャンペーンのためにアチャイさん一行がスピードボートで上流地域まで出向いたと聞いた。

◆コミュニティ・フォレスト計画、叶わず！

アチャイさんが頻繁に語ることの一つとして、水田跡地の緑化計画の頓挫話がある。2013 年頃に外国人から大口寄付の申し出があり、そのお金で村人の農用地を買い取って植林をしようと考えていた、という話。もともと自給自足で生活していた村の周りには、米作を中心とした農用地があるが、大洪水による不作の連続や牛の飼育開始に伴う獣害（それと同時に進んできた貨幣経済の浸透）の影響で、そのほとんどがいわゆる耕作放棄地になっている。アチャイさんの話では、そのうち所有者の合意が得られた 200ha を買収し、村の共有地として管理し、森にする計画を立てていたと言う。ただ、そのうちの一人と揉め事があり、計画が白紙になってしまったとのこと。当時の彼は村長でなかったにしろ、リーダー的存在で家族が歴代の村長である有力者ですら、そのような些細な問題で村全体のための計画を断念してしまった。この村で、人間関係がどれだけ重要視されているか、そしてその不和が及ぼす影響の大きさが分かる例だと思う。

結局、200ha の土地は近くの町に住むアントンさんという中華系の人により買収されたと、アチャイさんは言う。今ではアブラヤシのプラズマ[5]農地として整地され、一部はすでに植え付けされている。（＊正確な確認は取れていないものの、手書きの地図で彼が示すその場所は整地されたエリアと一致する。）「あの土地をアントンじゃなく私が買ってたら、森になっていたのになぁ！」と、アチャイ節。

◆アチャイさんと村のこれから

今のアチャイさんには、「川沿いに竹を植えて水質浄化や木材供給に役立てる」などの計画がある。様々な地域を渡り歩いてきた彼は、地元 NGO との交流を通して得る様々なアイディアに対しても比較的オープンなように見える。今後、外からの刺激を柔軟に取り入れつつ村の改善計画を実行していくのかもしれない。願わくば、水田跡地の植林計画のような頓挫話が増えることだけは起きないように・・・

（写真上：農用跡地の整地のために水路を拡大している。写真右：アチャイさんと村の子ども達）

[5] プラズマ：企業の大農園の周辺にある土地を、地元民等の小農に 1 世帯 2ha ごとで分譲するシステム。小農はクレジットにより土地を購入し、収穫の利益から初期投資費用をさながら家のローンのように返済していく。

2017年6月

現地での資材購入

１月に現地（中央カリマンタン）へ行った際、パンカランブンの街で地球環境日本基金からの助成金を用いて植林用資材を購入しました。遅くなってしまいましたが、ご報告いたします。

いざ、お買い物！！

クマイの町で学校を中退した子供たち等に英語や環境教育を行っているアルバインが、ワゴン車を持っていて資材が買えるお店にも詳しいというので、お買い物に付き合ってくれました。

ノリノリのディスコミュージックを大音量で流し、いざパンカランブンへ。クマイの事務所からパンカランブンは車で20分くらいだったでしょうか。3～4曲をずっと繰り返し再生させた愉快な車は、砂ぼこりが舞う街中のホームセンターの様なお店に到着しました。

購入した資材

お店に入り店員のお兄さんに尋ねながら順に資材を探します。ミッシーが事前にリストアップしてくれたものを基本とし、レート等も考慮して何をいくつ買うべきかを考えていくのは案外時間の掛かる作業でした。

購入した資材を一部ご紹介します。

【ポンプ】

2台×Rp.3,400,000(約29,800円)/台

中国製のものよりも少し高いですが、安心を優先してRobin日本製のポンプを購入しました。

お店の前でオイルやガソリンを少し入れて、きちんと動くかどうか確認してくれました。

帰って披露すると、バスキさんも「とても良いポンプだ！ありがとう、しっかり活用するよ！」と喜んでくれました。

【ホース】

(青：右写真上側)14m×Rp.25,000(約220円)/m

(透明：右写真下側)60m×Rp.16,000(約140円)/m

ポンプへ向かって吸水する用の青くて固いホースと、ポンプから放水する用の透明で柔らかいホースとを購入しました。

青いホースは2インチ(5.08cm)、透明のホースは1インチ(2.54cm)のものを購入しました。

【ドドス】

(14cm)12 個×Rp. 153,000(約 1,340 円)/個

(10cm)3 個×Rp. 110,000(約 960 円)/個

植林では、苗を入れ込む穴を掘る時に使う道具。まっすぐな棒の先に右写真の刃を取り付けます。地面に突き刺して使用する等、シンプルで汎用性の高い道具との事。

【チャンクル（クワ）】

12 個×Rp. 60,000(約 530 円)/個

ドドス同様、持ち手の棒は森にある木を上手く加工して差し込むので要らないのだそうです。

ワニのマークが付いたこの製品が上等の品で、バスキさんも納得の様子でした。質の悪いものだと、すぐに刃先が欠けてしまうとの事でした。

この他にもスキやホースのノズルなどを購入しました。基本的には植林用の資材として日々使ってくれる予定ですが、緊急の火災時には消火用にも活用されることが期待されます。

最近綺麗なシャワールームを増築したので以前の水浴び場が空いているから、そこを倉庫に改築してきちんと保管するよ、丁度良かった！と言ってくれていました。

「りさこ」さんより

（「会員のページ」はお休みですが、最近何度もミーティングに参加してくれている「りさこ」さんに書いていただきました。）

高校、大学の授業で環境問題を知り、「平和な世の中になっても安全に生きられる場所がなかったら？」と考えるようになりました。しかし、高校 3 年のときから理系分野の勉強に全く触れてこなかった私は、環境の勉強をしようと手探りで情報を集めてみるものの、何から手をつけていいか分からず、「いま地球規模で起きている様々な環境問題にいくら関心があっても、自分はなんの役にも立たないんだ。」と思い込んでいました。ウータンに出会ったのは、ワンワールドフェスティバルのときでした。連絡先を聞いて後日ミーティングに参加させていただきました。本当は一度だけ参加してみようという軽い気持ちだったのですが、皆さんのボルネオに対する熱い姿勢を見ていたら、私も力になりたいと思ったのでした。メンバーの皆さんはあたたかく迎えて下さいました。こんな自分を皆さんの輪の中に入れていただけて、本当に嬉しいです。

「環境問題は、難しくてよく分からない」というのが私も含めほとんどの人の本音だと思います。実際私もウータンに出会うまでは、パーム油のプランテーションについて全く知りませんでした。温暖化や砂漠化、大気汚染など、環境問題は簡単に説明できるものではありませんが、起きている問題は、今を生きる人や動物だけでなく、その子ども、そのまた子どもの世代へと影響を与えてしまいます。大切な人に安全に暮らして欲しいと願うのは、どこに生きる人も同じだと思います。きれいごとで、幼稚な考えではありますが、この気持ちを忘れずに、私なりにウータンに貢献できたら幸いです。これからどうぞ、よろしくお願いいたします。

＝過去最高に温暖化が進む中、トランプ政権が温暖化防止｛パリ協定｝から離脱＝

7 June/記 (Badman Nishioka)

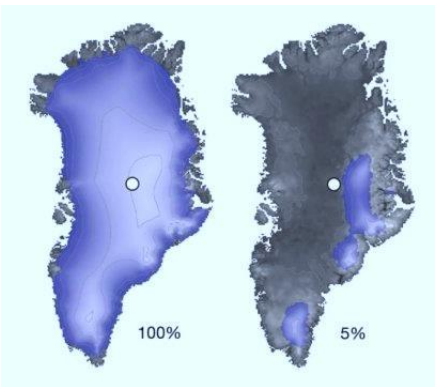
【2016 年は過去最高の温暖化の記録更新】

「2016 年は世界の平均気温を 0.07 度上回り、気温上昇の記録を 13 ヶ月も更新した」と NASA が伝える。英国気象庁も「2015 年からのエル・ニーニョが南太平洋で暖かくなったため 0.2 度気温を押し上げた」と報じる。また WMO 事務局長は「昨年からの北極圏の氷解が異常であり、今までの 2 倍になる勢いだ」という。

そんな中 3 月 28 日、トランプ米国大統領はオバマ大統領が決めた温暖化防止対策を見直す大統領令にサインした。やはりパリ協定から離脱か?

パリ協定は世界 146 ヶ国が合意し、ほとんどの国が参加予定。冷戦続くシリアと戦争後の経済調節出来ないニカラグア 2 カ国が署名していない。目標は「2100 年までの気温上昇を 2 度－1.5 度に抑える」ことだ。そのために「①森林や海面からの吸収源を大切にする、②5 年ごとに見直し、③各国が目標設定し行動、④途上国へ 2020 年まで毎年千億ドル支援」が中身だ。

グリーンランド氷解進み 5%残の 2016 年 9 月



【トランプのパリ協定離脱—固執した大ミス】

米国は二酸化炭素を世界の 15%排出する国だ。

「パリ協定は、石炭産業等で GDP3 兆円を失くし、中国、インドを優遇する。米国と市民を守るという重大な義務を果たす。私はパリでなく、ピッツバーグ市民を代表して選ばれた」とトランプ氏は離脱を 6 月 1 日に演説。

しかし、ピッツバーグ市は 88 自治体での再生エネルギー100%推進市なのだ。米国内の自治体が動き始めた。ピッツバーグ市長ペドウ氏は「ピッツバーグはパリ協定を強く支持する」とすぐさま狼煙を上げていた。カリフォルニア知事ブラウン氏は「大統領は科学を操ることも出来ない。離脱に強く反対し、各自治体は団結する」と発信した。演説の数時間前に EU と中国は、「協定に力を合わせ邁進する。後戻りしないし誰も置き去りにしない」と声明した。

【トランプの 6 つのミス・・リーダー資質に欠ける】

ミス 1 つ目は石炭産業の労働者は 7 万人弱で、ソーラー産業の労働者は 16 万人、風力発電は 10 万人、再生エネルギー全体で 29 万人の雇用だ。再生エネルギー価格は 2008 年から 2016 年に 85%も下がり、石炭、石油は 2024 年に需要も完全に衰退すると米環境庁や多くの科学者予測だ。

2 つ目は、トランプ側近から古い資料提示されたが、大統領は新しい資料は見ようとしなかったと言う。

3 つ目は各国の反発が異常に強いと予想していなかった。仏マクロン新大統領は「私たちの惑星を再び、私たちの手で偉大にしよう」と翌日、パリで演説した。国連グテーデス事務総長は同日に「米国は非常に残念。悲しいことだ」と声明した。

4 つ目は、多くの企業 Google、アップル、あのエクソン等も含め数百企業がトランプ氏に協定に残るよう文書をだしたが、放置した。D ウッズ・エクソン CEO でさえ「米国は協定参加したままで競争力がある」と。多くの企業は、離脱に反対している。（実は企業グループがエクソンに任せすぎたのが失敗だった。）

5 つ目は、自治体の状況を把握していなかった。パリ協定については、当初の 62 市長から6月7日には274市長が「パリ協定を強く推進」と声明した。6 つ目は支持率急落。25%しか支持しないと世論調査の速報だ。

総会での会計報告を訂正いたしましたので掲載します。

２０１６年度　会計報告

（収入）	
前年度繰越金	3,292,672
（内インドネシア消防支援寄付　38,800）	
会費	332,470
一般寄付	43,000
インドネシア消防支援金（2016年分）	920,755
講師謝礼	20,000
集会収益	69,922
物品販売	43,000
関西地域NGO助成プログラム	300,000
計	5,021,819

（支出）	
会報制作費	158,220
事務所家賃	144,000
他団体参加費・協賛金	35,000
会場費	49,600
交通費	128,370
通信費（含クラウド通信料）	118,103
講師・通訳謝礼	60,000
販売物品仕入れ	19,425
事務費	39,971
海外NGO支援（消防支援金より）	515,800
海外NGO支援（助成金より）	280,000
クラウドファンディングお礼費用	97,370
クラウドファンディングお礼送料	57,931
インドネシア消防支援金繰越	713,755
次年度繰越金	2,604,274
計	5,021,819

イノさんのきまぐれ読書あんない

井下祥子

大人こそ読みたい児童書　『熱帯林をいく』　鬼丸眞人文　荒井真紀絵

福音館書店

　著者は「ウルトラアイ」「シルクロード　」「緑の秘境　林冠」などを手がけた NHK のプロデューサー。

食虫植物ウツボカズラの袋の中の液のなめてみた結果は？

「声に出して読んでみて欲しい」という。

鮮やかな熱帯林や生き物の絵が各ページを彩る。

監修は熱帯林研究の湯本貴和

月刊たくさんのふしぎ 2000 年１２月号。

（毎月、1　冊 1 テーマで、粘菌の知能から

砂漠に独り暮らすおばあさんまで、「ふしぎ」を

取り上げる。大人が読んで損はない）

図書館でも雑誌コーナーでなく、科学の棚などにあることが多い。

World Forest News　世界の森林ニュース

2017 年 3 月～2017 年 5 月　　by S.Kohsaki

HSBC が森林破壊ゼロ政策を発表

森林や泥炭地を破壊するパーム油企業への多額の融資を行ってきたとグリーンピース報告書で批判されたヨーロッパ最大の香港上海銀行は，森林破壊ゼロ（No Deforestation, No Peat & No Exploitation）政策を発表し，顧客企業は 6 月末までに NDPE を誓約し，2018 年末までに NDPE の独立検証結果の提出が求められる。［Mongabay 3 月 3 日］

サラワク州が新規伐採免許を発行しない森林政策

州首相は前州首相による短期伐採免許の新規発行禁止措置を継続し，州有地での新規伐採免許は発行せず，永久保存林（Permanent Forest Reserve）を維持して持続可能な森林管理・林業経営を行い，保護林での観光収入の増加を目指す森林政策の見直しを発表。［Borneo Post 3 月 8 日］

デンマークがミャンマー産チーク材の流通差し止め

EIA の告発に基づきデンマーク環境省が過去 4 年間にミャンマーからチーク材を輸入した 7 企業を監査した結果，すべての企業で EU 木材規則に定められた原産地証明書等の不備が見つかったため，ミャンマー産チーク材の流通の差し止めを命令。［Mongabay 3 月 20 日］

NGO が FAO に森林の定義の変更を求める公開書簡

約 200 の自然保護団体が FAO にアブラヤシ以外のプランテーションを森林とみなす定義の変更を求める公開書簡を送ったが，FAO は変更の考えはないと回答。FAO は各国から報告されたデータに基づき 5 年毎に世界森林資源評価を発表しているが，衛星画像解析技術の進歩でプランテーションとの識別が可能になったため。［Mongabay 3 月 21 日］

熱帯林の分断化により 31％多くの炭素を排出

衛星画像解析の結果，全世界の森林は 5000 万か所に分断され，森林の周囲は5000 万kmに及ぶことが判明。森林縁辺の樹木は枯死率が高いため現在推計されている熱帯林からの炭素排出より 31％多くの炭素を排出しているとの研究結果発表。［Mongabay 3 月 21 日］

タイのアブラヤシ生産拡大計画で泥炭地林に圧力

世界第3位のアブラヤシ生産国のタイは今後9年間で国内パーム油生産を 50％増加させる計画。タイではアブラヤシ栽培面積の 70％を小農が占め，南部の泥炭地やマングローブ保護林への小農の侵入をめぐる国立公園局等行政との対立が激化。［Mongabay 3 月 24 日］

サバ州の野生生物保護区での架橋計画は中止

マレーシア・サバ州の野生生物保護区キナバタンガン川での架橋計画は科学者や NGO などが強く反対していたが，州政府森林省が中止を発表。［Mongabay 4 月 20 日］

シンガポールでマダガスカル産紫檀大量輸入に有罪

シンガポール高裁は 2014 年にマダガスカルからワシントン条約に違反して 3 万本，5000 万ドルの紫檀を輸入した企業に有罪判決。シンガポールは違法材取引の中枢で中国への中継地で，世界各地での紫檀押収量の合計を上回るワシントン条約史上最大規模の押収。［Mongabay 4 月 26 日］

ボルネオ島の森林破壊を明らかにする地図ツール

CIFOR の科学者が 4 年がかりで完成した The Atlas of Deforestation and Industrial Plantations in Borneo は 1973 年以来 40 年以上のボルネオ島でのアブラヤシ等のプランテーションによる森林破壊を， 1ha 以下の規模まで知ることができるインタラクティブな地図ツール。［Mongabay 4 月 28 日］

森林破壊ゼロを実現するためのツールキット開発

パーム油サプライチェーンの多くの企業が森林破壊ゼロを公約しているが，現場での実現は容易でない。それを可能にするための HCS（High Carbon Stock） Approach Toolkit を産業界と NGO が合同で開発。［Mongabay 5 月 10 日］

西カリマンタン州知事が泥炭地開発を認めるよう書簡

西カリマンタン州知事が大統領に対し，Sungai Putri 泥炭地で木材企業による排水工事を認めてほしいとの書簡を送っていた。昨年12 月の泥炭地開発を凍結する規制に大統領が署名する以前に始められていた開発行為は継続されるべきと主張している。［Mongabay 5 月 20 日］

インドネシア大統領が泥炭地域開発禁止措置を延長

原生林と泥炭地への新規開発免許凍結措置は 2011 年の大統領令から継続し，さらに 2 年間延長される。しかしこの大統領令は法的拘束力がなく，6 年間のモラトリアム期間に森林破壊は高い水準で推移し，実効力に疑問を呈する声が多い。［Reuter 5 月 24 日， Jakarta Post 5 月 26 日］

ベトナムが 2030 年に森林面積率 45%を目指す

ベトナムは REDD+プログラムにより 2030 年までに森林面積率を 45％に増加させ，温室効果ガス排出量を BAU シナリオ比で 8％削減を目指す国家計画を発表。ベトナムの森林面積率は 1990 年には 28.4％まで減少したが，その後の植林により 2015 年にはすでに 47.6％（FAO 統計）まで回復し世界で最も森林面積増加率の高い国。［english.vietnamnet 5 月 27 日］

ベトナムがカンボジアからの違法材密輸調査を約束

ベトナム企業と癒着したベトナム地方官僚ぐるみの組織により，カンボジアの国立公園で大量に違法伐採された木材がベトナム中央高原へ流入したのち EU へ輸出されているとの EIA 報告書による国際的批判の高まりを受け，ベトナム政府はこの問題を調査すると発表。［Mogabay 5 月 8 日，31 日］

ウータンメンバー　メディアに進出！

西岡代表「ラジオ深夜便」に出演

西岡代表が、４月２２日の早朝、知る人ぞ知る NHK の「ラジオ深夜便」に登場しました。関西発ではありますが、全国放送です。早朝の 4 時から 5 時まで中村宏アナウンサーの質問に答えて、ウータン・森と生活を考える会の発足当時から現在までの動きをおもいきり語っていました。早朝のため、なまで聞けた人は少ないかも知れませんが、録音もとっていますので、聞いてみたいかたはお知らせ下さい。（石崎 info@hutangroup.org）

以下西岡代表の感想です。

きっかけは幼い頃、堺・高石の海を埋めたてられたからです。たまたま行ったフィリピンで禿げ山にされた森々を見てア然！今こそ違法材の停止活動から森林再生にとり組みたいと放送録音後に、再度思い直しました。

ゆっことイッシーが京都のコミュニティ放送「京都三条ラジオカフェ」に出演

ウータン・森と生活を考える会のミッションの一つは「私たちの暮らしと森林減少とのつながりについて理解を広め、消費など様々な行為を見直すよう提案します」というものです。

メディアとしては古くからある“ラジオ”ですが、地域で市民や NPO が主体となって発信するコミュニティラジオが日本各地で広がってきました。

今回は、日本初の NPO 法人によるコミュニティ放送局三条ラジオカフェの KYOTO HAPPY NPO！という番組で、ウータンの活動紹介をしました。（5 月 14 日 On Air）聞き手も NPO の老舗きょうと NPO センターの方ということで、30 分の持ち時間をフルに生かして、熱帯林減少の問題から私たちができることは何かということまで充実した内容となりました。

「いつでも聴くことができる」というのもインターネット放送のいいところですね。ぜひご聴取ください！

京都三条ラジオカフェのホームページ→「地域とまちづくり」→番組名「**KYOTO-HAPPY･NPO**」の**「暮らしとつながる熱帯林を守るため、世界の人々と活動しています。」**をご覧下さい。（http://radiocafe.jp/200310001/episodes/2017-5-14oa/）

会計より　　**ありがとうございました！**　　井下祥子

会費・寄付をいただいた方（2017.2.24～2017.5.31）（敬称略）

☆イオン環境財団より５０万円の基金をいただきました。

インドネシア消防支援金の受付は終了いたしました。

クラウドファンディング・振込み・集会での寄付等、2017 年 1 月末までに計 1,229,555 円もの支援金が寄せられました。

消火用ジェットシューターのように（性能が現地製品にまさるため）日本で購入・寄贈したもの以外は、協力している現地 NGO の FNPF に渡し、消防パトロールや火災発生時の初期始動など、他の基金では使いにくく、資金が不足しがちな活動に役立ててもらいます。ご協力いただきました皆様、心からお礼を申し上げます。いちはやく10万円もの支援をくださった方、森で活動するためのザックを寄付してくださった方など、皆様、本当にありがとうございました！

開発にともなう火災は毎年のように起こるため、被害を最小にするための活動が欠かせません。

ウータン・森と生活を考える会は今後も支援活動を続けます。よろしくお願いします。

✉　＜おたよりから＞

☆（前略）16 名でサラワク植林隊、小生の娘ムコが隊長で実施してきました。

振込用紙をもって領収に代えさせていただきます。

領収書がご入用の方は、お手数ですが振込用紙にその由ご記入ください。（メッセージも掲載させていただくこともございます。掲載不可の場合はお書き添えください）

☆ **口座間の送金を利用されますと、お名前のふりがなのみの通知になり、住所不明のため、新規の方は会報が届かない場合があります。お手数ですが、振込用紙をご利用ください。**

パプアニューギニアの森の破壊と村人の生活の今
ー森は生命の源ー

ポール･パボロさんは、原生林を守るために生命がけの活動を続けてきた。
村々の人々と共に、不法な伐採企業に抵抗し、暴力を振るわれても怯むことなく、伐採企業を訴えた裁判を起こし、今に至っている。

パプアニューギニア各地では、1970 年代から日本企業やマレーシアの伐採企業による昼夜を問わない伐採と丸太輸出が行われてきた。輸出された丸太の 60%が日本行きで、日本で合板(特にコンパネ)となって建築現場で使用され使い捨てられてきた。現地からの丸太輸出先が中国中心となった現在も、日本はアジア･中国経由の膨大な合板輸入を行い、最大の熱帯材消費国であり続けている。

日本の私達の住まいと暮らしが、ポール･パボロさんたちの最後の原生林をも消そうとしている。彼は多忙を縫って連帯を求めて来日する。(パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会のチラシより)

写真：ポール・パボロさんと子どもたち

写真：清水靖子と子どもたち

●お話し　ポール･パボロさん

(1972 年パプアニューギニアのニューブリテン島ムー村生まれ)

●通訳・概要説明　清水靖子（メルセス会修道院）

●司会　西岡良夫（ウータン・森と生活を考える会代表）

とき:7月７日(金)
午後6時30分~午後8時30分
場所：大阪聖パウロ教会
１階会議室（大阪府大阪市北区茶屋町２－３０）
参加費：１０００円

主催：「パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会」
共催：「ウータン・森と生活を考える会」

問い合せ　：石崎（info@hutangroup.org 090-8145-1146）**西岡**（hutan.nishioka@docomo.ne.jp）まで

※ポール・パボロさんについて、詳しくは「パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会」のホームページ→「ニュースレター」の「太平洋の森から 38 号」をご覧下さい。

ウータン・パーム油学習会第7弾

『油まみれな食生活への政治経済史ーパーム油など油脂の消費拡大を促した構造的変遷』

講師：平賀緑さん

日時：７月２９日（土）14:00～16:30

場所：大阪聖パウロ教会１階会議室

（大阪市北区茶屋町２－３０）　定員２０名　参加費は無料

関西NGO協議会のあるところが大阪聖パウロ教会です。
（関西 NGO 協議会ホームページより）

平賀緑（ひらがみどり）さんとは
（ご本人に書いていただきました。）
　かつて、丹波の小さな畑にて有機菜園と鴨たちを育て、手づくりバイオディーゼル燃料で車を走らせ、持続可能な食とエネルギーを促す適正技術を紹介していました。その後、ロンドンで食料栄養政策を、京都大学大学院で農業・食料の国際政治経済学を学び、現在、京都大学の研究員や立命館大学の非常勤講師などを勤めながら博士論文を書いているところです。（hiraga@midori.info）

この学習会は地球環境基金の助成を受けて開催します。

※申し込み・問い合わせは、石崎（info@hutangroup.org 090-8145-1146）まで

☆今年もやります！ウータンボルネオエコツアー

「森の中でのホームステイ～ボルネオ島エコツアー」　　日程：９月２日(土)～９月９日(土)

◆ツアー内容：ツアー会社「マイチケット」のホームページ→「ツアーを探す」→「インドネシア」

◆これまでのエコツアーの様子：「ウータン・森と生活を考える会」のホームページ→「ボルネオエコツアー」

※申し込み締め切りは７月 25 日（火）。詳しくは、同封のボルネオエコツアーのチラシをご覧下さい。

☆ニューブリテン島南岸の原生林を守るポール・パボロさん大阪に来たる！

「パプアニューギニアの森の破壊と村人の生活」

７月７日（金）午後６時３０分～午後８時３０分　場所：大阪聖パウロ教会　参加費：１０００円

（なお、くわしくは本誌ｐ１９をご覧下さい。）